

香水瓶

森岡 正作

胸中に防波堤ある卯波かな
砂利道をバス来る記憶麦の秋
麦秋に兆せる埒もなき渴き
挨拶のやうに反転つばくらめ
並べたる香水瓶の美貌かな
鎌倉の五山烟れる走り梅雨
夏草に攻め立てらるる寓居かな

梅漬けの

登四郎先生の第十四句集『羽化』のお終いに「梅漬けの残りし一つ紅うるむ」が載っている。「羽化」は先生が亡くなられた後に、研三主宰をはじめご家族のお力で編まれたものである。御句は朝食の時に梅漬けを召し上がられて、なお一個が小さな器に残っていたのであろう。箸を置かれてしみじみと見つめられ、上手に漬けられたやわらかな紅い梅を「紅うるむ」と詠まれた。その「うるむ」に先生の美的感覚はもちろんであるが、胸中に去来する穏やかな思いが感じられる。

先生は梅漬けが好きだったことと
思う。第一句集の『咀嚼音』に「梅漬けてあかき妻の手夜は愛す」があるように、毎年奥様が漬けられた梅漬けを賞味されたのである。我が家でも毎家庭の梅を梅漬けにするが、「干し方がまずかった」とか「塩加減がどうの」と言い合っている。食べるだけの私であるが梅漬けの出来はどうあれ、とてもまだまだ「紅うるむ」と詠める境地には至らないのである。